

2月2日(金)

令和六年度 A日程入学試験問題

国語

— 注意事項 —

2 1

問題は1ページから28ページ、解答用紙は一枚である。
次の指示にしたがうこと。

文学部（日本文学科・中国文学科・史学科）は **1**・**3**・**4** を解答すること。

文学部（外国語文化学科・哲学科）、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、
観光まちづくり学部は **1** が必須、**2**・**3**・**4** から一つを選択して解答すること。

（解答する問題番号を、解答用紙のマーク欄にマークすること。選択問題を複数解答した場合は無効とする）

4 3

解答はすべて別紙解答用紙に記入すること。
試験時間は六〇分である。

1 〔全学科の 必須〕

文学部日本文学科・中国文学科・史学科は解答欄 1 ～ 10 に、文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済

学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は解答欄 1 ～ 14 に解答すること。

(文学部日本文学科・中国文学科・史学科は問一～問八で40点)

(文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は問一～問十二で70点)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

かつてわたしは東北のちいさな城下町に住んでいました。その街のことをおもいだすのですが、その街では駅は街のなから非常に遠かったのです。不便でした。^(a)不便だったけれども、むかしの駅はそうだったのですね。じぶんたちの住んでいる街から遠い場所を選んでつくられていた。ともかくそうした街の⁽¹⁾たたずまいのなかで、まず暮らしが街の中心にあるという街のありようが、まだまもられていました。そうしたありようが街の閉鎖性を生んでいたことはじゅうぶんみとめたうえで、しかしいまのようにもっぱら駅を中心にして街がつくられてゆくようになってからみるみるうしなわれたのは、じつは街の閉鎖性ではなくて、暮らしが中心にある街のありようだったということをかんがえます。

むかしの駅がそのように遠くにつくられたのは、かならずしもいまでいう交通公害などをかんがえてのことだったわけではなかった。むしろ街の暮らしというものが、駅を中心として動く動きかたをひつようとしていなかっただけからでしょう。駅なしには街の暮らしがなりたないということはなかつたのです。いまわたしたちが駅を中心とした街の暮らししかもっていないことをかんがえるとき、そうした街の変化には戦争と戦後の時代がおおきくかかわっているのであって、街にたいして駅のもつ意味は、もっともつと深くかんがえられています。駅は今日、私鉄なら私鉄私有の、国鉄なら国鉄私有のものであり、街のものではありません。そうであるために、駅はその街の表情をもつことは、⁽²⁾めつたにありません。しかし、街の自由な感情があらわれるのは、人びとによる利用権が私有権にさきだつところにおいて、なんです。

戦後の過渡期に、駅は駅前広場をもっていました。井伏鱒二の小説『駅前旅館』が書かれたところが、駅というものがわたしたちの街の暮らしかたの行動の起点になってきた時期にあたるのとみていいとおもいますが、そのころは駅前広場というものは意味をもっていた。しかしいまの駅はもはや駅前広場をもちません。それは^(b)クルマ寄せとしての意味はもっていますが、街に住む人びとの広場としての意味はうしなってしまうた。駅前広場というかたちにはわたしたちじしんの広場の可能性の萌芽^{ほうが}がすこしはあったとおもうんですが、そうした広場の可能性はいまでは

うしなわれています。それでいて、わたしたちの暮らしにしめる駅の役割だけは、ますますおおきくなってきてるんですね。重要さをいっそうましながらしかも誰にとってもコモンスとしての場所でなくなった駅というのは、いかにも今日の街のありようをあらわす一つの象徴だろうとおもいます。

駅の例にはつきりとしめされるのは、交通の手段がどんどんあたらしくなればなるほど、街の暮らしのパターンというものがどんどん根本から揺れうごいて変わっていつてしまわざるをえないという、わたしたちの街の暮らしのありかたです。もし駅が中心の時代が去れば、つまり電車中心の時代が去れば、またべつの交通機関を中心にワーツとそこに群らがるかたちでの街の暮らしのしかたというものをわたしたちはどこまでも追うだろう、という気がするのです。汽車の時代が去って、電車の時代、クルマの時代がきた。おなじようにいつか電車の時代、クルマの時代は他の交通手段の時代にとって代わられるかもしれない。しかし、それでもわたしたち自身^(c)、どこまでも交通手段にたよった暮らしのありようはおそらく変わらないままだろう。

とすれば、そうした交通機関に歩く行為をすべてゆだねたきりのいまの暮らしようをこそ、どうにかかんがえなおし、どこかで変えてゆくことができないかどうかでしょうもないようなところにまで、わたしたちはすでにきてしまっているのではないのでしょうか。クルマ信仰によってわたしたちの社会が得たのは、たんに速度をあげて通過するだけの道、わたしたちの歩くという行為がみうしなわれた道、もはや日常のコモンズたりえないような道でした。その街のありようのなかで、一つの方向にどんどんスムーズなしかたでひきずられてゆく、あるいは一つの方向にむかって流されて疑われないような社会の意識が、絶えず実感的に社会的につくられてきているというこの怖さを、いまさらにかんがえます。アウトバーンという一方通行の高速道路の思想をつくりだし、のこしたのは、ナチス・ドイツの社会でした。みずからの「足」をもたない生きかた、暮らししかたというものを不断に生みだす構造をまぬがれないいまのじぶんたちの街の暮らしかたを、どう変えてゆくか。^(x)ありうべき街の暮らしが問われるなら、まずこのことが問われるべきではないのでしょうか。

よく絵なんかでみたことがあるのですが、社会科なんかで、街というものの見取図がえがかれるとき、同心円の都市がうつくしい都市だとおしえられた記憶があります。戦後の都市計画はしばしばそうした同心円の都市がうつくしいんだというような発想で、中心があつてその外をぐるぐるとめぐる環状線をもった都市というかたちでかんがえられてきた、ということがあつたとおもう。そのような、いつも中心からどどん円をひろげてゆくという同心円的な発想は、いまでもわたしたちの都市のありようをどこかできめているだろうとおもうし、たとえば土地価格公示などの地図をみると、それは中心をおなじくするおなじ距離の同心円をかぶせてしめされていて、^(y)都市における価値感覚、あるいは方向感覚というものがそういう同心円的感觉によっていまも根ぶかく、しつかりささえられていることがうかがわれます。しかし、こうした同心

円的な都市のイメージこそ、都市のへりをどこまでも拡大してゆくかたちをわたしたちの街のありようにあたえてきたので、街がそのように同心円としての街のようであるかぎり、どこまでいっても外側に円をえがくような都市の現象はつづくだろうとおもえる。

(d) わたしたちの社会の意識は、そうした同心円的な感覚を避けがたく深くかぶっている。日々の街の暮らしのなかで、行動がそのような同心円的な方向性をいられているために、わたしたちの社会の意識、日々の政治意識のなかではいつまでたっても、一つの中心において無限に円をえがくような社会像が根を張っているというのではないだろうか、と疑うんです。つまり、国家という中心があつての社会、国益がまずもつて優先するような社会像ですね。しかし、ほんとうにわたしたちの暮らしというものは、そういうものなのか。ほんとうに都市の暮らしかたはそのような同心円的なものだろうか、とおもうのです。わたしは、ちがうとおもいます。

(e) 一つの街のおおきさはほんとうはひとつがじぶんで歩けるおおきさ、そのちいささをもたなければ街とはいえないのだとわたしはかんがえるのですが、じぶんで歩ける街の日々が街の暮らしの中心をなしてはじめて、じぶんが「街のなか」にいるとおもえる社会が一人ひとりに親しく感覚されるようになるとおもうのです。街のなかに暮らすということは、そうした日々のありようと本来切りはなせないものだったんです。たとえば、雑然とした市場に買物にゆくと、じぶんが「そのなか」にいるという感覚が濃密にある。しかし、市場が壊されて区画整理されて名店街にでもなってしまうものなら、「そのなか」にいるという感覚が気がついたらもうなかつたというようなことは、誰しもが日常の経験にもっているはずです。

街のありようは、わたしたちじしんの暮らしのたてかた、生きかたというものの根本にかかわっている。わたしはそうおもいます。わたしたちが今日、街に暮らしながら「街のなか」にいないという感覚にとらえられているとすれば、それはわたしたちが街をみずからの「歩く」という行為をとおして感覚することが、すでにむずかしくなってしまうからです。一人ひとりがみずからの「足」をとりもどすしかたのなかで、歩くことがたのしみであるような街のありようをみだしたい。その⁽³⁾途をみつけることができなければ、今日の都市がどのように斬新なデザインでつくりかえられても、街がわたしの街としてかんじられるということはむずかしいでしょう。

わたしたち自身のうちに、「街のなか」に暮らしているのだという自由な感覚がとりもどされなくちゃならない。都市をきらい田園にかえれということもできるだろうけれども、それはおおくそういつてみる感傷をまぬがれることができず、^(Z)好むと好まざると街に暮らすには暮らしの立ちゆかない人びとにとっては、他人たちの都市にはかならない都市をいかに「じぶんの街」として生きられるかということこそ、ぬきさしならないんです。わたしたちがいつまでたっても「街のなか」に住んでいるという感覚をうしなつたままに暮らしてゆくのであれば、わたしたちは避けがたくじぶんのアイデンティティをじぶんの日々、じぶんの「住まいかた」をうしなつてゆくほかないだろうとおもえます。

(f) 「市民」という言葉が日本語として成熟した言葉になっているとはおもえない。横浜市民であるとか、京都市民であるというふうには、自治体の身分としての「市民」という言葉はありえても、そこに一人ひとりが街の暮らしをもつ一人の自覚をこめて「市民」という言葉をじぶんのアイデンティティの根拠としてもつということが、今日なおじゅうぶんに根づいているとはいえない。いまのわたしたちの街の暮らしの負うその不確かさが、じぶんのいちばん確かな自己証明は何かと問われたら「国民」だということたえしかなかったというような事情を、戦争においても戦後においても、そして現在においてすらなお変わらないままにしてきたし、しているということはないでしょうか。しかし、じぶんの街なしにじぶんの国だけがあるなどということは、けっしてありえないんです。わたしたちは、「国がなくなった」ということはあっても、街がなくなったことはほとんどない」（バーナード・ルドフスキー）という歴史の事実を、じぶんの日々にわすれるべきじゃないとおもうのです。

（長田弘の文章に基づく）

（注）○国鉄—JRの民営化前の略称。日本国有鉄道の略。

○コモンズ—入会地などのように、共同で利用・管理される土地。

○バーナード・ルドフスキー—アメリカの建築家・エッセイスト。

問一 二重傍線部 (1)・(2)・(3) の意味として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、(1)は解答欄 1 に、(2)は 2 に、(3)は 3 にマークしなさい。

1	(1)	2	(2)	3	(3)
オ	イ	ウ	エ	オ	ア
歴史	振る舞い	不自由	成り立ち	ひたすら	しばしば
オ	イ	ウ	エ	オ	ア
足跡	端緒	契機	方法	ただただ	ほとんど

問二 傍線部 (a) の理由として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 4 にマークしなさい。

- ア 古くから続く街の暮らしは閉鎖的で、新しい交通手段を受け入れる素地がなかったから。
- イ かつては人びとの暮らしにおいて、鉄道が重要な位置を占めてはいなかったから。
- ウ 街で暮らす人びとがみな、むかしながらの鉄道のない不自由な生活に慣れていたので。
- エ その頃の街の規模では、鉄道を利用して移動する必要などなかったから。
- オ 東北の小さな城下町では、駅前広場を作って自由に使う発想が生まれなかったから。

問三 傍線部 (b) の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 5 にマークしなさい。

- ア クルマの利用者には便利な場所であっても、徒歩で来る人にとっては使いにくい場所となってしまったということ。
- イ 鉄道会社に土地の利用権が認められるようになって、利用する人びとは私有権を奪われたままにされてしまったということ。
- ウ クルマ中心の社会には対応可能な場所であっても、行動の起点としての空間ではなくなってしまうということ。
- エ 街の人びとがさかんに往来していても、誰も和やかな表情を見せることなくただ通り過ぎるだけになってしまったということ。
- オ 移動のために行き来する重要な空間ではあっても、街の人びとに共有される空間となる可能性をうしなってしまったということ。

問四 傍線部(c)の理由として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 6 にマークしなさい。

ア 交通機関がもたらした利便性への対応によって、街に暮らす人びとは、いまや安易な方法へと流されるようになってしまっているから。

イ 交通機関が必要とした高速道路などの建設を許容したことによって、街にいる人びとは、都市景観に関する美意識を磨く機会をもちやなくしてしまっているから。

ウ 交通機関が生み出した暮らしの実感が得られない空間への馴化じゅんかによって、街に住まう人びとは、歩くという行為が持つ意味をもちや見失ってしまっているから。

エ 交通機関の発展が与えた豊かさの日常化によって、街に集う人びとは、徒歩の時代における移動の意義をいまや理解できなくなってしまうから。

オ 交通機関の発展に伴う移動手段の多様化によって、街の住人たちは、いまや好みや目的に応じて手段を選ぶことができるようになってしまっているから。

問五 傍線部(d)の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 7 にマークしなさい。

ア わたしたちの社会観は、同心円状に広がっている都市での暮らし方によって培われた意識の深層に根付いた方向感覚によって支えられているということ。

イ わたしたちの社会的常識は、学校教育によって刷り込まれた同心円の都市がうつくしいという考え方から抜け出せなくなっているということ。

ウ わたしたちの社会への思いは、都市のへりをどこまでも拡張させようとする容易に取り除けない固定観念によって歪んだものになっているということ。

エ わたしたちの社会の捉え方は、都市は一つを中心から外に向かって円をひろげるように発展していくというイメージに強く影響されているということ。

オ わたしたちの社会概念は、かつての国益優先の時代に見取図として描かれた同心円的な都市がもたらす政治意識によって規定されてしまっているということ。

問六 傍線部 (e) の理由として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 8 にマークしなさい。

ア 「街のなか」にいるという感覚は、暮らしが中心となった空間を体験することでしか生まれなため、交通機関がもたらす移動のためだけの空間を失くす必要があるから。

イ 「そのなか」に自分がいるという感覚は、今では雑然とした市場に身を置くことでしか得られないため、駅を中心に同心円を描くような整然とした都市計画をやめるべきだから。

ウ 「そのなか」にいるという実感は、その場所を親しく感覚することでもたらされなため、歩いて楽しむことができる規模の街であるべきだから。

エ 「街のなか」に存在するという確信は、自分に見合った空間でしか生まれてこなため、住まう場所をわたしの街と呼べるように作り変える必要があるから。

オ 「そのなか」にあるという自覚は、自分の足で歩くことでしか得られないため、同心円状に拡大する中心を持った歩ける空間として街を機能させるべきだから。

問七 傍線部 (f) の理由として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 9 にマークしなさい。

ア 交通機関に歩く行為を任せる暮らしを不断に生み出す都市にあって、「市民」という言葉は、行政上の区分として使われることはあっても、住まう街の「そのなか」で暮らしているという実感を伴って使われているとはいえないから。

イ 同心円状に広がる都市にあって、「市民」という言葉は、都市の名を冠して横浜市民や京都市民として使われることはあっても、都市とは異なる場所で生まれ育った多くの住民によって自己証明の根拠として使われているとはいえないから。

ウ 高速道路を生み出すような思想を人びとに強いる都市において、「市民」という言葉は、自治体が一方的に与える呼称として使われることはあっても、街の政治への積極的な参加を促す形で使われているとはいえないから。

エ 交通機関を中心として作られていて歩く機会が少なくなった今の都市では、「市民」という言葉は、街を通過するに過ぎない者たちに対して使われることはあっても、街の暮らしで育まれた存在に対して使われているとはいえないから。

オ 国益を優先させる国家が生み出す現在の都市においては、「市民」という言葉は、国家にアイデンティティをゆだねるかたちで使われることはあっても、「街のなか」に存在の根拠を求めさまよう「国民」が自覚的に使っているとはいえないから。

問八 問題文の趣旨として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 10 にマークしなさい。

ア 交通手段の進化によって人びとの街に対する意識は大きく変化した。交通手段は人びとに移動の利便性をもたらすが、歩行の機会が減ること人びとは「街のなか」にあるという実感を奪われてしまうのである。クルマの時代になり、日常のコモンズとして機能せず、生活の場でない空間が街に目立つようになっても人びとは異議を唱えなかった。いわば、移動の利便性に対する信仰とでもいべきこの事態は、街の景観の目まぐるしい変化を許すことにつながり、人びとは同心円状に拡大する都市という空間に身を置くことを余儀なくされた。その結果、都市にありながらそこで暮らしてはいないという感傷を抱きつつ人びとは生活するようになってしまった。田園生活の実現が困難である以上、この状況から脱するには、足で歩ける規模の街を新たに作り出さなければならぬのである。

イ クルマ社会の到来によって暮らしの中心は都市へと移行した。汽車や鉄道は駅前にコモンズを備えていたことでそれまでの街の暮らし方が許されていたが、この新たな交通手段が街にもたらした通過するだけの空間は、歩くこと、すなわち「そのなか」にあると親しく感じることを完全に拒絶したのである。暮らしの実感のない空間の登場はそれまでの街の姿を変えるだけでなく、移動手段を前提として同心円的に拡大していく都市という空間を生み出すことになった。この新たな空間は人びとに移動と拡大という行動原理をもたらすだけでなく、中心の重要性を意識下に根付かせることになった。それゆえ、人びとは生活も労働も中心に寄与すべきものだという社会通念に縛られてしまい、自らそこに暮らしているというアイデンティティの根拠を喪失することとなってしまったのである。

ウ 交通手段の変遷はそのまま街が都市へと変わりゆくさまを映し出している。汽車や鉄道の起点としての駅には、辛うじて生活空間としての機能を期待したが、クルマの時代が発想したアウトバーンに象徴される通過するだけの道は、歩くという行為を拒絶して人びとの居場所ではない空間を街に誕生させてしまった。だが、クルマ専用の道が生み出された背景には、中心からへりへと拡大してゆこうとする都市の原理を認める必要がある。その原理こそが都市生活者に社会の中心へと向かう方向感覚と国家に価値を置く感覚とを刷り込むのである。もはや田園という場所が存在しない以上、都市を住みにくくしているそうした感覚から自由になるには、歴史の事実を学んで、国家や社会という幻想を脱し、街に暮らす「市民」としての意識を成熟させるしかないのである。

エ 交通機関の発達によって暮らしが中心にある街は変化を余儀なくされた。駅はコモンズとしての機能を持たず、クルマが必要とした高速道路を代表とする通過するだけの道は、歩くという行為を許容しない。こうした暮らしの実感を得られない空間を持つ都市は、一つの方向に流されることに疑念を抱かない意識を人びとにもたらした。また、同心円を描くようにして拡大していく都市のありようは、中心があつてこそその社会というイメージを人びとに植えつける。交通手段の利用なくしては移動できない同心円の都市ではなく、自分の足で

歩ける大きさの街で「そのなか」にいるという自由な感覚を取り戻すことこそ、都市に暮らさざるを得ない人びとの喫緊の課題であるが、そのためには、国家に自己の根拠を求める「国民」ではなく、街の暮らしを持つと自覚する「市民」とならねばならないのである。

才 鉄道からクルマへと移り変わる交通手段に対応する形で街はとどまることなく変わり続ける。駅前広場は人びとが集う公共の場として機能する可能性を持っていたものの実現せず、続くクルマの時代では移動手段に対して信仰と呼ぶべき意識が生み出され、人びとはたんに速度をあげて通過するだけの空間を許容するようになり、一つの方向にどんどん進む社会に疑念を抱かなくなった。一方で、その方向感覚は、同心円的に拡大して行く都市の発展を根底から支えており、中心としての国家という意識をさらに強固なものにしていくって人びとに「国民」という自覚をもたらしているが、かつての城下町にその芽生えを見出すことができる街に暮らし街を支えようという「市民」としての自覚は育まれないまま、自治体においては横浜市民や京都市民といった呼称が形骸化してしまったのである。

注意

文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は、次のページに問題が続きます。



問九 (文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部のみ解答すること)

波線部 (X) の理由として最もふさわしいものを、次の A～オの中から一つ選び、解答欄 11 にマークしなさい。

A 歩くという行為を許容しない街の暮らしの意識を変えるには、自らの足で歩かない生きかたや暮らしかたをもたらずに至った歴史についてまずは十分に知っておかなければならないから。

I 歩くことの楽しみを奪われた街にあって人びとの暮らしを取り戻すには、ナチス・ドイツのアウトバーンのような、街をそうした空間にする仕組みについてまずは考察しなければならぬから。

ウ 交通機関が中心となった街に潜む危険を回避するには、一つの方向にスムーズに流れることを疑わない社会の意識が途切れることなく生み出されている背景についてまずは検討する必要があるから。

エ 交通手段に頼った暮らしようを人びともたらす街で人びとが抱える問題の本質を明確にするには、まずは一方通行の高速道路を発想し実現したのがナチス政権下のドイツであったことから考察しなければならぬから。

オ 自分の足で街を体験しない暮らしかたの是非を明らかにするには、まずはアウトバーンに象徴されるような生活意識を不断に生み出すナチス・ドイツの社会構造を明らかにする必要があるから。

問十 (文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部のみ解答すること)

波線部 (Y) の説明として最もふさわしいものを、次の A～オの中から一つ選び、解答欄 12 にマークしなさい。

A 都市生活者の価値観や行動のパターンの源泉には、街は円を拡げるように発展するものだとする発想があるということ。

I 街での暮らしに必要な規範や価値観を示唆するのは、同心円的な発想のもとに生成される社会像だということ。

ウ 暮らしより国益が優先された事態の背景には、国家という中心があつての社会というイメージの存在があるということ。

エ 都市での暮らしを単調でつまらなくさせるのは、人びとの心の奥に深く根付いた同心円的な感覚だということ。

オ 都市での行動に同心円的な方向性を強制するのは、中心をもった社会という根拠のない幻想だということ。

問十一 (文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部のみ解答すること)

波線部(Z)の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 13 にマークしなさい。

ア 街に暮らすしかない人びとは、異郷の地に暮らさなければならぬという感傷的な思いをどうにも捨てられないでいるということ。

イ 街に暮らすしかない人びとは、他人の土地にあつて自分らしく生きようとして身動きが取れなくなっているということ。

ウ 街に暮らすしかない人びとは、「街のなか」に居るといふ感覚をもつて生きるにはどうするべきかという問題から目を背けられないといふこと。

エ 街に暮らすしかない人びとは、あるべき「住まいかた」の実現のために他者の住まう都市に自己存在の根拠を求めざるを得なくなっているといふこと。

オ 街に暮らすしかない人びとは、暮らしのなかに自由な感覚を取り戻そうとするあまり自身に相應しい生き方を見失つてのつぴきならぬ状況に陥っているといふこと。

問十二 (文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部のみ解答すること)

問題文の内容としてふさわしいものを、次のア～カの中から二つを選び、解答欄 14 に二つマークしなさい。

ア むかしの街の生活が閉鎖的であったのは駅を中心として移動することを求めていなかったからだ。

イ ナチス・ドイツによるアウトバーン建設は、人びとを同心円的な行動を疑わぬ「市民」とするためであった。

ウ 街に暮らす人びとは国家に自己証明の確かな根拠を持つといふ状態とはなっていない。

エ 新たな交通の手段は暮らしの様相を一変させるが、交通手段を中心とした暮らしかたという点では変わらないだろう。

オ 『駅前旅館』を書いた井伏鱒二は戦後の社会では人びとが集う空間の重要性が増すことを予感していた。

カ 歩くことを通じて街を感覚できないと、暮らしについても「そのなか」に居るといふ実感を得られなくなってしまう。

この問題は、解答欄 21 ～ 28 に解答すること。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(30点)

教育に関するこれまでの意味づけ方や理解のあり方を律してきた「大きな物語」としての理念や思想の失墜や終焉しゅうえんの主張が肯定的に受け止められるとき、例えば、普遍的で抽象的な人間性の個人的実現ないし形成過程として子どもの発達を捉え、その発達への援助的介入として教育を捉えるといった理解図式を支える前提はもはや「瓦解(1)している。そして、この瓦解状況に面しての、教育学的な人間研究における応答の一つとして、「大きな物語」のもつ信頼性を前提とした「陶冶理想や理想的人間像などを大上段(3)から論じる姿勢に代わって、身近で具体的な人間関係や世代間関係、親子、教師―生徒、大人―子ども関係を通じて幾重にも紡ぎ出されるさまざまな「小さな物語」の意味を丁寧(a)に解明していく」とする姿勢が現れてくることになる。

教育における「小さな物語」への注目は、諸組織が複雑化し肥大化するにつれ、その成員が社会や時代の全体を展望しつつ自己のアイデンティティを見出し、繋ぎ止めていくことができます困難になった今日の状況にあって、身近な生活圏での人間関係を通じて日常的な出来事の意味を発見し直し、共有していくことで、生きていることの実感を取り戻したいという、私たちの一見まっとうな願望にうまく呼応している。社会や時代、そしてそこに生きる自分の生活が、全体として何に基づきどこをめざして歩んでいるのかについて、私たちがこれまでのように「大きな物語」に依拠することができない以上、身近な諸々の出来事から出発して、それらのもつ時間的空間的な結びつきをその内部から広げ厚くしていくことを通じて、生きていることの意味を紡ぎだし撚りよ合わせていくほかはないように見えるからである。

しかしながら、物語論的人間研究の問題意識から試みられる教育の理念や思想のもつ物語性への批判的考察は、教育における「大きな物語」の終焉とそれに代わる「小さな物語」の復権という枠組みで論じられる地点に留まることはできないと思われる。なぜなら、それが「物語」であるかぎり、出来事を時間の流れに沿って筋立てて意味づけ、私たちが生きる営みとして納得し理解することが可能な形でまとめ整えられなければならないのであり、「Ⅰ」の側に立つことによって、私たちは出来事の意味づけ方における物語的制限を免れているわけではないからである。「Ⅱ」への注目は、「Ⅲ」の筋立てのもつ圧倒的な力によって、永きにわたって強引に閉ざされてきた生きることのもう一つ別の意味づけに、私たちの眼を開かせることになった。しかし、そこに見出されたもう一つの意味づけにも、小さな「物語」なり

の筋立てがあり、その筋立ては、小さいながらも出来事の全体を一貫した視点から見通すことによって成り立つのなら、筋立てることの両義性の問題は、「小さな物語」にもやはり当て嵌まる^はというべきである。

物語論的視点からの教育学的人間研究にとっての、教育における大きな物語への批判的眼差しの射程は、物語の「大・小」の問題を突き抜けて、全体を見通した筋立てのもとに出来事を意味づけるといふ「物語ること」^(b)それ自体が内包する問題領域へと進み入らねばならない。確かに、教育における小さな物語は、これまで教育を支えてきた大きな物語の自明的正当性が崩壊し、私たちの生き方を根拠づける意味基盤が深く動揺させられる困難な状況のなかから、辛うじて見出され救い出された教育についての意味づけであるともいえるから、物語論的反省をそこへもまた徹底させていくことは、あるいは過酷な振る舞いと映るかもしれない。だが、物語論的人間研究における問題意識の展開と深化を踏まえ、そこに教育学における人間や教育についての捉え方を根底から変革していく力を見出し、その力にどこまでも与^{くみ}しようとするなら、「物語る存在」としての私たちの生き方が抱え込んでいる問題性が、小さな物語を幾重にも紡ぎ出しつつ生きようとするあり方にも貫かれている点を看過することはできないのである。

教育学的な人間研究における物語論的視点は、教育も教育学もともに人間にとっての基本的な生きる営みとしての「物語ること」であると捉えることによって、「理論—実践」関係をめぐる不毛な議論の消耗戦から私たちを救出することができる。またこの視点は、これまで永く密かにしかし強烈に、私たちの教育についての発想や思考を縛ってきた理念や思想に横たわる物語性を剔抉^{てつげつ}することによって、私たち自身の身近で日常的な生の現場から教育を意味づけていく試みへと私たちを促すことができる。教育学が、生まれ育ち老い死にゆく私たち一人ひとりの人生や生きることの意味をめぐる問題に深くかかわることを、これからも自らに課し続けるような「教育と人間」についての研究であるならば、ここに挙げた点だけでも、物語論的視点のもつ意義は大きいといえるのもあろう。

しかし、すでに論じたように、私たちにとって物語論的視点のもつより重要な性格は、出来事を筋立てつつ意味づけるといふ「物語ること」^(c)自体へと向けられる不断の自己反省の側面であると思われる。この反省の徹底を通じて、一見慣れ親しい物語るといふ営みは、結局は納得のいく結末に至るといふその日常的に馴染みの形姿を変容させていく。筋立てることによって開かれもし閉ざされもするさまざまな意味づけが、それぞれに参照し合う直中に、筋立てることのすべてを根拠から揺さぶり続けつつ自己自身を語る、いわば「物語の異形」が現れるのである。この「異形」の出現は、「物語ること」の反省運動が自己自身を通して「物語ることの外」に触れる瞬間でもある。このとき私たちは、「物語ること」の不思議さと出会っている。生きることを「物語ること」は、つまりは、生きることににおける「物語ることの外」と遭遇すべく営まれるのであり、この「外」との遭遇を通じて、意味づける行為のもちえていた原初的な創造性が、物語ることのなかに蘇るのだとはいえないであろうか。

このように考えてくるとき、物語論的視点が、生まれ育ち古い死にゆく私たち一人ひとりの人生や生きることの意味をめぐる問題にかかわる教育学的な人間研究にもたらしうる意義の核心を、次のように述べるものが許されよう。すなわち私たちが、例えば、人生や生きることにおける「教え―学ぶ」行為や「養い―育つ」関係の意味を物語ることは、それらの行為や関係を安定した形で生の中に位置づけることであるよりもむしろ、物語論的な自覚と反省を通じて、「教えと学び」、「養いと育ち」を物語ることの外に触れることなのである。そして、この「外」に触れることが、「物語の異形」の出現に呼応するものであるならば、教育をめぐる私たちの物語は、「教育と人間」についての慣れ親しい「語り方」「聴き方」から敢えて訣別し、^(d)教育を物語ることの不思議さに目覚め続ける運動なのだといえよう。さらに、生きることが物語ることであるからには、この不思議さはとりもなおさず、生きることそのものの不思議さでもあろう。

(鳶野克己氏の文章に基づく)

問一 二重傍線部 (1)・(2)・(3) の意味として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中からそれぞれ一つずつ選び、(1) は解答欄 21 に、(2) は 22 に、(3) は 23 にマークしなさい。

- (1)
- 21
- ア 中心部が徹底的に碎かれること
 イ 細部にわたるまで理解されること
 ウ 大きな力により細分化されること
 エ 困難に遭い急に勢いを失うこと
 オ 一部の崩れから全体がこわれること
- (2)
- 22
- ア 芸術性を開花させること
 イ 性質や才能を鍛え育て上げること
 ウ 最も望ましい姿を探すこと
 エ 目的に応じて訓練すること
 オ 徳の力などで人を感化すること

- (3)
- 23
- ア 弱点を隠す高飛車な態度
 イ 相手を軽蔑する尊大な態度
 ウ 自己主張に終始する態度
 エ 大げさで居丈高な態度
 オ 頭ごなしに拒絶する態度

問二 空欄 I Ⅰ Ⅲ に入る三語の組み合わせとして最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄

24 にマークしなさい。

- | | | | |
|---|---------|----------|-----------|
| ア | I 大きな物語 | II 大きな物語 | III 小さな物語 |
| イ | I 大きな物語 | II 小さな物語 | III 大きな物語 |
| ウ | I 小さな物語 | II 大きな物語 | III 小さな物語 |
| エ | I 小さな物語 | II 小さな物語 | III 大きな物語 |
| オ | I 大きな物語 | II 小さな物語 | III 小さな物語 |

問三 傍線部 (a) の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 25 にマークしなさい。

- ア 教育に関する理念や思想が生を支えとしない現代、親子関係による日常の意味づけが重要視されるようになったということ。
- イ 生きることの理念や思想を持つことが難しい現代、身近な人間関係を支えとして生の実感を見出すようになったということ。
- ウ 教育についての理念や思想を信じるのが難しい現代、一人ひとりの人間の生のあり方に目を向けるようになったということ。
- エ 教育についての理念や思想が共有できない現代、個人が生活の中からアイデンティティの確立を求めるようになったということ。
- オ 教育の理念や思想が統一的に語られなくなった現代、社会全体の支援を頼らずに子どもの成長を見守るようになったということ。

問四 傍線部 (b) の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 26 にマークしなさい。

- ア 「物語ること」は、多くの出来事を時間的空間的に結びつけ筋立てること、一つのまとまりにしてしまうということ。
- イ 「物語ること」は、整理された筋立てにより、広く人々に理解され納得されるべきだと求められてしまうということ。
- ウ 「物語ること」は、人間の進歩や発展が筋立てて述べられることにより、変化を許容しなくなってしまうということ。
- エ 「物語ること」は、筋立てられたまとまりにしか、人間形成の肯定的な意味を見出せなくなってしまうということ。
- オ 「物語ること」は、歴史的な整理により、教育を発展的なものとする意味づけを徹底してしまうということ。

問五 傍線部(c)の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 27 にマークしなさい。

ア 身の回りの出来事を整理し、物語に意味を与えながら語る営みは、自己の内面をあますところなくさらけ出すということ。

イ 理解しやすく筋立てられた物語の全てを疑い、慎重に物語の内容をくり返し見つめ、絶え間なく考え続けるということ。

ウ まとまりのある物語を語る行為が、都合の良い意味をつくり出そうとしている事実に基づき、物語を再検討するということ。

エ 腑に落ちる結論を導き出す物語は、普段の生活を話題にした語りとなるので、自身の生き方を振り返る必要が生じるということ。

オ 筋立てに即して出来事を意味づけて語る私自身について、客観的に観察し直し、どこまでも批判的に考察し続けるということ。

問六 傍線部(d)の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 28 にマークしなさい。

ア 教育学的な人間研究は、理念や思想を信じることのできない現代において、人間の成長や進歩のありようを生の中に位置づけようとする筋立ては成立せず、「物語の異形」を考察するしかないということ。

イ 教育と人間についての研究は、「教え―学ぶ」行為や「養い―育つ」関係を意味づけることのできない、教師と生徒や親子のつながりについての問題の外にある、「物語の異形」とともに存在するということ。

ウ 教育と人間についての研究は、「教えと学び」、「養いと育ち」の意味を問い直し、誕生から死に至る人生の全体像を筋立てて物語ると自体にある、「物語の異形」を検討し続けるということ。

エ 教育学的な人間研究は、一人ひとりの日常を生きる現場から教育を意味づけていく中で、一貫した視点から筋立てて物語ることに対する自覚と反省を通じて、「物語の異形」に向き合い続ける中で現れてくるということ。

オ 教育と人間についての研究は、整った物語による意味づけや理解のあり方では収まりのつかない、筋立てから排除された「物語の異形」を感じ取る中で意義づけられていくということ。

〔文学部日本文学科・中国文学科・史学科は **必須**。文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は **選択**〕

文学部日本文学科・中国文学科・史学科は解答欄

41

 ～

58

 に、文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は解答欄

41

 ～

54

 に解答すること。

(文学部日本文学科・中国文学科・史学科は問一～問十一で40点)

(文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は問一～問八で30点)

次の文章は、『源氏物語』の一節で、二人の男君から求婚され、苦悩のはてに入水しようとしたものの助けられた女君が、女君を保護している尼君から初瀬詣でに誘われる場面である。尼君はこの女君を亡き娘の身代わりのように思っている。これを読んで、後の問いに答えなさい。

九月になりて、この尼君、初瀬に詣づ。(a) 年ごろいと心細き身に、恋しき人の上も思ひやまれざりしを、かくあらぬ人とおぼえたまはぬ慰めを得たれば、観音の御験うれしとて、返申しだちて詣でたまふなりけり。「いざたまへ。(c) 人や知らむとする。同じ仏なれど、さやうの所に行ひたるなむ験ありてよき例多かる」と言ひて、そそのかしたつれど、昔、母君、乳母などの、かやうに言ひ知らせつつ、たびたび詣でさせしを、かひなきにこそあめれ、命さへ心になはず、たぐひなきいみじき目を見るはといと心憂き中にも、知らぬ人に具して、さる道の歩きをしたらむよとそら恐ろしくおぼゆ。(f) 心ごはきさまには言ひもなさで、「心地のいとあしうのみ(2) はべれば、さやうならむ道のほどもいかながなど、つつましようなむ」と(3) のたまふ。もの怖ぢはさましたまふべき人ぞかしと思ひて、しひてもいざなはず。

はかなくて世にふる川のうき瀬にはたづねもゆかじ二本の杉と手習にまじりたるを、尼君見つけて、「二本は、またもあひきこえむと思ひ(4) たまふ人あるべし」と、戯れ言を言ひあてたるに、胸つぶれて面赤めたまへるも、いと愛敬づきうつくしげなり。

ふる川の杉のもとだち知らねども過ぎにし人によそへてぞ見る

(z) ことなることなき答へを口とく言ふ。忍びてといへど、皆人慕ひつつ、ここには人少なにて、おはせむを心苦しがりて、心ばせある少将の尼、左衛門とてあるおとなしき人、童ばかりぞとどめたりける。

(注) ○初瀬——長谷寺。初瀬の観音として信仰される。 ○返申しだちて——御礼参りのようにして。

○母君、乳母など——女君の母君と乳母など。 ○ふる川——初瀬川のこと。

○二本の杉——「初瀬川ふる川の辺に二本ある杉 年を経てまたもあひ見む二本ある杉」(『古今和歌集』、旋頭歌)による。

○ふる川の杉のもとだち——女君の素性の意を込める。 ○少将の尼——尼君の弟子の尼。 ○左衛門——尼君の侍女。

問一 二重傍線部(1)と(4)の敬意の対象の組み合わせとして最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 41 にマーク

しなさい。

- | | | | | |
|---|--------|----------|--------|----------|
| ア | (1) 尼君 | (2) 尼君 | (3) 女君 | (4) 女君 |
| イ | (1) 女君 | (2) 女房たち | (3) 尼君 | (4) 女君 |
| ウ | (1) 尼君 | (2) 女房たち | (3) 女君 | (4) 男君たち |
| エ | (1) 女君 | (2) 女房たち | (3) 尼君 | (4) 男君たち |
| オ | (1) 尼君 | (2) 尼君 | (3) 女君 | (4) 男君たち |

問二 傍線部 (a)・(e) の意味として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中からそれぞれ一つずつ選び、(a) は解答欄 42 に、(e) は 43 にマークしなさい。

(a)

42	ア	結婚にふさわしい年齢で
	イ	晩年になって
	ウ	いつもながら
	エ	長年
	オ	毎年

(e)

43	ア	だまされて
	イ	つき従って
	ウ	助けられて
	エ	うち明けて
	オ	見放されて

問三 傍線部 (b) と同じ人をさす本文中のことばとして最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 44 にマークしなさい。

- ア 知らぬ人
- イ もの怖ちはさもしたまふべき人
- ウ またもあひきこえむと思ひたまふ人
- エ 過ぎにし人
- オ おとなしき人

問四 傍線部(c)の解釈として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 45 にマークしなさい。

- ア 他人がきつと知ろうとするでしょう
- イ 誰にも知られることはないでしょう
- ウ 他人の人に知られてもかまいません
- エ 誰もが知っていることでしょう
- オ 他人の人が知らないことをするのです

問五 傍線部(d)のさす内容として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 46 にマークしなさい。

- ア 初瀬のような人里離れたところに行くと、心持ちも変わって命が延びるといふ例が多い、ということ。
- イ 仏のなかでも初瀬の観音はご利益があるから、何度も参詣することこそ意味がある、ということ。
- ウ 初瀬のような霊験あらたかな場所で勤行すると、御利益があつて幸運にめぐまれる例が多い、ということ。
- エ 仏のなかでも観音は尊いところで功德を積んでいるので、ありがたい霊験を示す例が多い、ということ。
- オ 初瀬のような尊い霊場で仏道修行をすると、勤行の効果があつて往生できるようになる、ということ。

問六 傍線部(f)はどういうことか。最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 47 にマークしなさい。

- ア 本心では初瀬詣でに行くことはとんでもないと思ひながら、気分がすぐれないからと穏便な言い方で断つた、ということ。
- イ 昔初瀬に出かけたことがあるのもう十分だと思ひながら、尼君の気分を害さないように謙遜した言い方で断つた、ということ。
- ウ 初瀬の観音のご利益に疑問を抱いているが、自分などには祈る資格がないからと角が立たない言い方で断つた、ということ。
- エ 心の底では人に見つからないようにしたいと思ひながら、ぜひ出かけたたいと本心とは逆の言い方で承諾した、ということ。
- オ 初瀬に出かけて恋人に会えるかもしれないと思ひながら、それを隠して冷淡な言い方で承諾した、ということ。

問七 傍線部 (g) のようになったのはなぜか。最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 **48** にマークしなさい。

ア 隠して書いていた手習の歌を尼君に見つけられて、下手な歌や字のことが知られてしまったと思ったから。

イ 何も知らないで書いた歌のなかのことばについて尼君に指摘されて、自分の知識の浅さがわかったから。

ウ 会いたい人にはきつと会えるという尼君の軽口によって、自分の本心を自分でも認めざるを得なかったから。

エ 自分が戯れに詠んだ歌について尼君に強く批判されたことによって、とても恥ずかしくなってしまったから。

オ 会いたい恋人がいるようだとの尼君の冗談によって、自分の本心を言い当てられたような気持ちがあったから。

問八 点線部の動詞 (一)「得」・(二)「おはせ」の、

1 活用の行 2 活用の種類 3 活用形

は何か。該当するものを、次の ア～カ の中からそれぞれ一つずつ選び、(一)の 1 は解答欄 **49** に、2 は **50** に、3 は **51** に、(二)の 1 は解答欄 **52** に、2 は **53** に、3 は **54** にマークしなさい。

1	ア	ア行	イ	カ行	ウ	サ行	エ	ヤ行	オ	ラ行	カ	ワ行
2	ア	四段活用	イ	上一段活用	ウ	上二段活用	エ	下一段活用	オ	下二段活用	カ	変格活用
3	ア	未然形	イ	連用形	ウ	終止形	エ	連体形	オ	已然形	カ	命令形

注意 文学部日本文学科・中国文学科・史学科は、次のページに問題が続きます。



問九 (文学部日本文学科・中国文学科・史学科のみ解答すること)

波線部 (W)・(X) の文法的説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中からそれぞれ一つずつ選び、(W) は解答欄 55 に、(X) は 56 にマークしなさい。

ア 受身の助動詞 イ 打消の助動詞 ウ 可能の助動詞 エ 完了の助動詞 オ 動詞の一部

問十 (文学部日本文学科・中国文学科・史学科のみ解答すること)

波線部 (Y) の現代語訳として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 57 にマークしなさい。

ア 効果がないようだ

イ 効果がなかったそうだ

ウ 効果がなかったのだった

エ 甲斐^{かい}がないわけではないようだ

オ どうして甲斐がないといえようか

問十一 (文学部日本文学科・中国文学科・史学科のみ解答すること)

波線部 (Z) はどのようなことか。最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 58 にマークしなさい。

ア 尼君は姫君の本当の思いを理解して真心をこめた返歌を何度も口のなかでつぶやく、ということ。

イ 姫君は尼君の歌に反発をおぼえて技巧的な返歌をすぐさま口に出して詠む、ということ。

ウ 姫君は尼君のやさしさに気づいて言うとおりにする旨を小さく口をあけて答える、ということ。

エ 尼君は姫君の思いやりに感動して同じ考えであるとの答えを即座に口頭で伝える、ということ。

オ 尼君は姫君の狼狽^{ろうはい}に気づかず格別すぐれたところのない返歌をすぐ口にする、ということ。

〔文学部日本文学科・中国文学科・史学科は **必須**。文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は **選択**〕

文学部日本文学科・中国文学科・史学科は解答欄 **61** ～ **70** に、文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は解答欄 **61** ～ **69** に解答すること。

（文学部日本文学科・中国文学科・史学科は問一～問七で20点）

（文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は問一～問六で30点）

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、問いの都合で返り点・送りがなを省いた部分がある。

伝フル毀キ者ラ、不ル可カラ不ル戒メ也。毀キ之ヲ来タルヤ亦タ多シ原もと矣。或イハ以テ其ノ迹あと疑ヒ
 或イハ侮リテ而シ為シ疑ヒ、或イハ惡ミテ而シ加フ誣ぶ焉。由ル小ニ人ハ者ハ更ニ身みづ質カラ之ヲ以テ蘄も
 信コトヲ一タビ傳フレバ焉、則チ百ニ千ニ人コトニ斯レ傳フ之ヲ矣。傳ヘテ既ニ廣マレバ而シ文ス致コト之ヲ益ム密ニシテ
 其ノ可キ信コト益ム牢ろう。此ニ訊たづ一ニ人ニ焉、曰ヒ有リト之レ、彼ニ訊スレバ一ニ人ニ焉、曰フ有リト之レ。
 同ニ異ニ交ウ執ヒレバ、則チ何ゾ說キテ而シ不ラ若クナラ固ヨリ有ルガ之レ也。雖モ其ノ所ノ知ル者ト、力チ不レ
 能ク救フ已レ。若クンバ是レ、則チ蒙もう垢こう陷かん汚をシテ、則チ終ニ身ニ無シ以テ自ラ明ラスル焉。夫ノ所ノ謂フ
 傳フル毀キ者ハ、惡ミテ而シ欲スル敗ラント之ヲ云フ爾ミ。毀キ在レバ君ニ子ニ、則チ可ケン不ル反カヘリテ而シ思ハ

耶。察其所由、弃其所以、無使其漸而播也。尚庶已乎。伝
日流言止於智者、謂其能禦其來也。矧肯易而伝之耶。

〔宋文鑑〕

(注) ○毀—そしること。人を中傷すること。 ○原—原因。源。 ○其迹—その人の過去の足跡。

○誣—事実でないことをでっちあげて言うこと。 ○質之—内容を検討する。 ○牢—堅固である。しっかりとしている。

○同異—異同のある説。 ○執—主張する。 ○不若固有之—もともとそうであったかのようにでなくさせる。

○蒙垢陷汚—不当に恥辱や汚点を被ること。 ○反而思—よく省みて考える。 ○漸—次第に進む。

○庶已乎—だいたい終息したといえよう。 ○伝日—古典籍にくとある。

問一 波線部 (W) (Z) の送りがなを含めた読み方として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中からそれぞれ一つずつ選び、(W) は解答欄

61 に、(X) は 62 に、(Y) は 63 に、(Z) は 64 にマークしなさい。

61	(W) 彼	ア	かれ
		イ	かの
		ウ	かくして
		エ	かなたに
		オ	かしこに
62	(X) 交	ア	おのおの
		イ	こもごも
		ウ	つらつら
		エ	しばしば
		オ	たまたま
63	(Y) 是	ア	この
		イ	かく
		ウ	かくの
		エ	これが
		オ	かかるが
64	(Z) 所謂	ア	ゆゑに
		イ	ゆゑん
		ウ	いはれ
		エ	いはゆる
		オ	いふなれば

問二 傍線部 (a) の解釈として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 65 にマークしなさい。

- ア 戒める必要はない
- イ 戒めるまでもない
- ウ 戒めなければならない
- エ 戒めないわけではない
- オ 戒めるべきか微妙である

問三 傍線部 (b) の解釈として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 66 にマークしなさい。

- ア 話が修飾されています
- イ 有識者たちもますます厳しく批判して
- ウ 当事者と親密な者がどんどんと加わって
- エ 優れた書き手がいよいよ面白おかしく描き
- オ 内密の話だがと断りつつ話すがさらに増え

問四 傍線部(c)の書き下し文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 67 にマークしなさい。

- ア 已すでに救ふ能はず
- イ 能く救はざらんや
- ウ 救ひ已いやすに能はず
- エ 救ふこと能はざるのみ
- オ 救ふ能あらずして已やまん

問五 傍線部(d)で、君子の対処として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 68 にマークしなさい。

- ア 伝聞をうのみにせず、自分にとどめること
- イ 他者の中傷はいけないと表明し続けること
- ウ 悪いことは悪いと断固として追及すること
- エ 中傷されている人をとことん擁護すること
- オ 中傷の発信源をつきとめ、撤回させること

問六 本文の内容に合致するものを、次のア～キの中から二つ選び、解答欄 69 に二つマークしなさい。

- ア 中傷を生み出す要因は、専ら憎い相手を陥れようとする邪悪な心である。
- イ 小人が中傷に関与している場合、その内容が荒唐無稽こうとうむけいになりがちである。
- ウ 中傷はその内容がひどいほど、多くの人の口によって速やかに拡散する。
- エ 中傷が広まるほど、その内容が事実であると信じこむ人々が増えていく。
- オ 広まった中傷は、内容の異同を比較検討することで、真相を究明できる。
- カ 中傷が広まる背景には、その悪を憎んで懲らしめようとする心理がある。
- キ ひとたび受けた悪評をなかつたことにするのは、智者でない限り難しい。

注意

文学部日本文学科・中国文学科・史学科は、次のページに問題が続きます。



問七 (文学部日本文学科・中国文学科・史学科のみ解答すること)

二重傍線部の読み方として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄

70

 にマークしなさい。

- ア あへて これを つたへやすきかな
- イ あへて これを かへて つたふるか
- ウ あへて かへて これを つたへざるや
- エ あへて やすくして これを つたへんや
- オ あへて これを つたふるを やすくせんや